



夷巡

記

第三編

卷

春



庫書	5
番	184
冊	40

13
3093
15



吉田屋

吉田屋

朝夷巡嶋記全傳第三編卷之五

東都

曲亭主人編輯



中輯第廿九

夷使の沐猴弁
衆兵が大夢覺

修羅五郎経任が使者蕪途鶴東二暴道種との饋物と齎して
 既子麻子著しく水草十郎昌甫主人元晴がかこみ向ひてその姓名を
 執達と當下蕪途鶴東二ハ膝子扇を突立しく元晴よりうら對ひ
 莊司殿ちあくの見忝あり君経任將軍ハ源九郎判官の陰見
 あり初め義経朝臣遮那王丸うらと死鞍馬を望く當國は赴て秀衡
 將軍時鎮守府の館に在せし死大河太郎兼任主が妹は野合て男兒を
 産せむ死よりて兼任その児を養ひ取くこが子とて修羅丸と名つけ

月長二編卷五

七二三

り。任任。任。任。軍。則。是。あり。さ。ま。が。往。時。建。久。元。年。大。河。河。が。義。旗。を。
奉。る。平。泉。子。起。り。一。ハ。そ。の。亡。君。泰。衡。按。察。使。の。為。の。と。あ。る。を。実。ハ。
こ。が。修。羅。公。を。奥。羽。の。主。と。せん。と。なり。あ。ら。あ。れ。ど。も。支。成。ら。ば。平。泉。の。
柵。攻。破。ら。れ。兼。任。何。ハ。あ。り。も。首。級。を。鎌。倉。に。贈。り。時。任。任。
招。軍。總。角。と。り。用。を。衝。死。柵。を。破。り。若。鷲。山。に。上。り。登。り。え。り。山。家。
三。歳。を。送。り。て。武。藝。軍。略。隱。形。の。術。習。ひ。ゆ。ど。と。い。ふ。と。か。し。是。れ。
大。志。あり。実。父。判。官。の。諺。死。を。憤。り。養。父。大。河。河。の。志。を。嗣。死。義。兵。を。
厨。川。に。起。り。あ。り。一。州。民。招。む。一。屬。後。ひ。諸。酋。戰。せ。し。て。臣。附。せ。り。遂。に。
平。泉。の。柵。を。獲。る。大。將。軍。の。居。城。と。成。り。或。は。や。鎌。倉。の。三。千。餘。騎。な。り。
蟠。娘。が。斧。を。り。て。車。を。む。り。あ。り。異。を。り。野。時。夏。を。泉。河。原。に。擒。む。
足。利。義。兼。を。鎮。守。府。に。追。走。ら。し。江。刺。裨。継。の。兩。郡。を。獲。む。り。和。殿。ハ。

秀。衡。の。舊。臣。と。り。鄰。郡。に。わ。り。か。が。り。あ。り。胡。越。の。あ。り。ひ。と。あ。せ。り。征。伐。
踵。を。旋。と。り。討。滅。せ。り。死。の。あ。れ。ど。も。國。の。宿。老。と。り。と。り。斧。鉞。を。
加。よ。忍。び。ぬ。り。ど。今。暴。道。を。り。と。諭。示。と。せ。あ。り。仰。の。趣。別。議。は。ゆ。べ。
和。殿。が。孫。女。匡。姫。國。色。無。雙。の。才。え。あり。修。羅。公。の。も。と。御。臺。所。せ。り。
お。さ。げ。早。く。平。泉。へ。あ。り。せ。り。中。搦。を。執。り。び。べ。一。通。納。聘。の。件。に。饋。
下。り。め。り。台。命。因。て。件。の。ど。り。速。に。兼。あり。て。拜。受。と。し。横。柄。の。頭。
交。り。と。演。述。を。元。晴。と。り。冷。笑。ひ。使。者。の。口。状。あ。ら。を。と。ぬ。む。と。り。判。官。
少。く。秀。衡。の。館。に。あ。り。と。死。陰。見。あり。と。と。を。實。に。實。に。と。り。こ。し。
あ。ら。ん。と。子。嗣。信。忠。信。ホ。ハ。始。終。彼。君。に。仕。へ。り。の。と。り。也。他。人。ハ。
あ。ら。ん。と。も。渠。ホ。が。あ。ら。ん。と。り。の。あ。り。任。任。が。よ。り。も。あ。ら。ん。と。り。判。官。殿。の。子。を。
い。ふ。ハ。世。を。迷。は。し。民。を。釣。り。奸。詐。あり。と。疑。ひ。か。し。の。あ。り。偽。と。り。の。あ。り。と。り。

判官殿と父とをあらう。これは婚嫁を徴する禽獸の初ひに汝をばや。姫ハ判官殿の息女之高館の城攻られぬ。おん父判官自焼のど死猛火の中より救ひとりく元晴が孫と一字と近属蒲殿の息子ある吉見冠者夫妻より。かれば攝家抑堂より婚嫁の徴ありては整ぐらるる。況叛逆賊首の煙仕霎時狩場を脱ぎ。雉子猫盗見們が妻を恋おとく。姫ハさうこそが家の牝猫とも與人や壁を穿梁を跨りて盗貯るる白銀巻絹。こが白眼を穢さんやとりて去と敷圍つ扇と丁と突入れく。及く素木の臺の脚ハ折けく立すもおん使者ハ名子負ふ心の暴道怒む。面色朱を汰だく刀の鞘まを掛れば鬼隔んと昌甫守詮主を守護。あま詰寄せり勢ひ當りく。これバ鶉東二氣色をやけけく。嘖然と。うわ笑ひ莊司ぬ。大人氣や。鎌倉の故幕府ハ伊豆国の流入あり。ふ。

武運めどく平家を滅し六十餘國を横領せり。これも亦君を凌げ。公家を蔑せし。偷見あり。さうより執權時政外威の威を逞く。幕府の子孫を絶んと。修羅公のそとと賊首といひ。べんや只成敗ある。の浮薄の議論取る足ら。又修羅公を義経の息子あり。とまらぬ。此ハ菅姫も判官の息女といふこと。甚不審。あれども先くち吉見冠者義邦。妻せり。実あり。後婚嫁ハ議。まらぬ。足下の陳謝よ。おん姫ハ。修羅公の妹。あま。措れど義邦共侶平泉へ迎とり。おん。遍与い。元晴頭をうち掉愚かり。暴道汝富那が辨を。言を。両端。持。とも誰う実更と。ぼり。あ。吉見殿ハ。比時夏。誣られ。逆徒の汚名を。立られぬ。と。矢塚達六が。白杖。より。邪。あ。



水草十郎

鶴東二おと



鶴東二計
信夫莊司
館小使

おの庄司

草目ハニシ...

赦免の召状近たあり。かゝる彼時夏が首を取て家裏に成よめり。
 せんともふのそ汝還らざる去れ無益の舌を動さば身首処を異よせん。
 退らざるを罵りし。これ昌甫守詮左右より誘立れを催促を鶴東二六
 その言の仍れざるを引提く身と起し利害を多しぬ愚人は
 千萬句も无益之立ちへりてこれらのうを修羅公より上へ大兵一に大館小
 臨まば瓦石と共に解ん。その時よ後悔せよ案内せよと西光黨を
 睨へかゝる退出たり。當下莊司元晴は若黨夥召近つけく云くと分付
 退らざるにぬと應て。ゆゑに件の饋物を運びかへし鶴東二が從
 者も嘘与たり。程よ次の間を竊せたる義邦ハ紙門を細く推開て
 要時とあそ目送り。廣光共侶立ち元晴より對ひ彼暴道が
 面魂徑任が股肱のりの吹かして撃笛ぬらり。渠案内を知れば。

徑任かゝるば衆を竭し。當郡を攻奪へし。彼めをかへされん。ありぬ
 々々といへば元晴より微笑し。推量のよく鶴東二奴ハ修羅五郎が軍師
 多し。さればと彼奴一人奪取とも徑任が亡むもわかれ渠ハ燒よ二三人
 その小勢あるをとり取菴を燒と沈ハ。弱さを示せり。のちあつせ。徑任
 時日に移さざ大軍をめて推寄来つべし。とがわたりて返せし。うらむが
 武勇悔り。ぐくか。うく鬼胎を抱ん。故に孫子は云凡明君賢將ハ
 動くよ。人ハ勝功を成と衆よ。所以の者を。由先これを。知る。は。か。
 先これを。知る。もの。鬼神。も。取る。へ。く。は。妻。の。も。象。を。は。く。は。度。を。驗。と。
 へ。く。は。必。や。人。も。取。て。敵。の。情。を。知。る。もの。と。い。へ。り。這。奴。既。に。情。を。知。ら。れ。く。
 間。を。用。する。所。を。徑。任。決。して。寄。寄。する。は。い。か。ん。然。と。い。へ。とも。非。常。の。備。肝。
 要。よ。い。と。その。掌。を。指。さ。し。て。説。諭。され。義。邦。ハ。廣。光。を。え。え。り。つ。

共は感嘆をうりたる。暫くして城戸守詮彼鶴東二を追かへせし。その日の為
 体を元晴義邦に報知せ某腹心のものをめて鶴東二ホッ跡を跟るを
 終賊地は還るや否をんせし。此と密語バ元晴はさうち領地を
 あくしを謀りよられ敵は英氣を示すといふも悔まらぬ。昌甫と
 あちを合して境は守の兵を倍せ防禦懈まらぬ。却説件の間諜者
 是より主後うら聚るをりく軍議を凝したり。却説件の間諜者
 その夜深くかり来り蘓途鶴東二暴道ホハ霎時も途は躊躇せ
 泉川をうち渡りて平泉のくへ去りぬ。され彼饋物を阿容くことめて
 還るを面あくやあひん泉川へ投入れく推流し。此川を渡をえ
 届され某ハ河原より引くし。いと告まバ守詮さもよと件の間諜者
 旁ひの馳く夏の赴を主の元晴は披露せり。さう程は鶴東二ハ只管は

馬を早ゆくその夜平泉に立か。修羅五郎経任は元晴のひり。す
 皆縁を兼ぎふと巨細は告り。経任はあへに大に怒る。おもひをも
 声とゆり立老菴奴いふれば。これを輕ぼり。あま至るやその議あり。ハ
 推寄せく一戦は踏潰さん陣おれせ。と通らう。鶴東二強ぐ氣色
 か。おん憤はさうりかれども元晴ハ老兵小敵ありと。悔り。一稗貫江刺の
 兩郡新は味方は属せれども機は臨く。変を生さバ元晴意外の援を獲ん
 挑く。く。其既ハ彼処に到く。ゆり。便宜を獲り。この故は
 元晴が無礼を咎め争は。十分渠を驕せ。饋物を運び。これ
 泉川へ捨させり。この迹を跟る。あ。ん。と。知。る。ん。れ。ども。真。の
 白銀巻絹ハ物一つも失ハ。豫あり用意。の推流せ。ハ。饋物。元晴
 あ。は。の。を。守。バ。某。既。ハ。面。目。を。失。ひ。ぬ。又。さ。う。は。謀。め。と。おも。ん。

かくの如く敵を弛べく兩三ヶ月を送りかば元晴義邦ホグ首と共ニ崖
 姫と取んと籠中の鳥を鑷より易りその謀ハ如此く之箇様ニ
 密語ハ經任すく莞尔とうち笑まこの謀甚より曩まハ汝れを資て
 時夏を擗ゆし更ニ亦間を用ひて義兼を走りたり。あられどもその
 功よ誇らば兩度の軍略神妙之努秘をべしと閑談時を移しけり。
 案下某生再説駒形村ある馬娘標吉郎嗣忠ハ圓山の館あり
 つ義邦は仕へる元晴則標吉を廣光が次よせしむ一隊の火長
 と防禦の軍配間断なく再々任追伐の鎌倉勢を以て程年
 終りも廿日あり三日四日といふ比ハ國府の使札到来して執權北條
 時政の下知状を通達し吉見義邦并家臣江廣光及び義秀
 并平小逆徒の喧えありといへどもその無実なるより悉く赦免せしむる村
 落邊鄙に至るまでこの旨兼知志といへり義邦も元晴もかくある
 べしと豫てありあはざるはあはれども又今さうのより地がえく一家の
 歡ハ疆わかくて新璞のと立かへて建仁も三年よりの正月ハ
 よろづは務多くて梅を挿頭の暇かれば義邦も廣光もこの春むらり
 春め死く餘寒の去るを待たざるは紅梅匂み如月の上旬よかりより北國ハ
 まご深雪あられいさるが冬のとくあわらし廣光ハ尺管は稻向許赴死こ
 朝夷が音耗とも向かへく又その婦人友鶴が安産のやうとも訊くし
 義邦あづまののりも元晴も告ぐ元晴も越の若上への信をうり
 措へ死のあはれ冠者ハ既ハ世間廣くありあひぬ又蒲殿のおん子
 と鎌倉殿の中知られしうの被安達盛長河を冠者の外祖父ありし
 在鎌倉ありければ三二と鎌倉へ遣し安達河を就て冠者の零落の辻を

かくの如く敵を弛べく兩三ヶ月を送りかば元晴義邦ホグ首と共ニ崖
 姫と取んと籠中の鳥を鑷より易りその謀ハ如此く之箇様ニ
 密語ハ經任すく莞尔とうち笑まこの謀甚より曩まハ汝れを資て
 時夏を擗ゆし更ニ亦間を用ひて義兼を走りたり。あられどもその
 功よ誇らば兩度の軍略神妙之努秘をべしと閑談時を移しけり。
 案下某生再説駒形村ある馬娘標吉郎嗣忠ハ圓山の館あり
 つ義邦は仕へる元晴則標吉を廣光が次よせしむ一隊の火長
 と防禦の軍配間断なく再々任追伐の鎌倉勢を以て程年
 終りも廿日あり三日四日といふ比ハ國府の使札到来して執權北條
 時政の下知状を通達し吉見義邦并家臣江廣光及び義秀
 并平小逆徒の喧えありといへどもその無実なるより悉く赦免せしむる村
 落邊鄙に至るまでこの旨兼知志といへり義邦も元晴もかくある
 べしと豫てありあはざるはあはれども又今さうのより地がえく一家の
 歡ハ疆わかくて新璞のと立かへて建仁も三年よりの正月ハ
 よろづは務多くて梅を挿頭の暇かれば義邦も廣光もこの春むらり
 春め死く餘寒の去るを待たざるは紅梅匂み如月の上旬よかりより北國ハ
 まご深雪あられいさるが冬のとくあわらし廣光ハ尺管は稻向許赴死こ
 朝夷が音耗とも向かへく又その婦人友鶴が安産のやうとも訊くし
 義邦あづまののりも元晴も告ぐ元晴も越の若上への信をうり
 措へ死のあはれ冠者ハ既ハ世間廣くありあひぬ又蒲殿のおん子
 と鎌倉殿の中知られしうの被安達盛長河を冠者の外祖父ありし
 在鎌倉ありければ三二と鎌倉へ遣し安達河を就て冠者の零落の辻を

愁訴一經任誅伐の軍兵をわづらふ義邦先登は進んで逆賊を討滅し
 亡父の汚名を雪んとあひ給はせしむるに往時建久の比故幕下頼朝
 冠者の外叔景盛ゆよ白檀丸の云々と宣はせしむるありしは
 年来安達何ふ疎遠は過さざりし世は憚の所なき今この便宜を
 のく愁訴せん彼人への君が外戚あり執達せしむるは三二を鎌倉
 案内の人のく安達父子は識らざればこの使を今更に外人に委す
 又越中岩上の稻向への馬兼標吉を遣はし朝夷生今ハ必彼処は
 ありといふもあはれはるその音耗のわやや家内の安否を問はんの
 標吉郎ハ彼人への初対面といふもあはれはる使あはれこの議は從ひ
 又とよ義邦これを諾あひて標吉よりを告ぐ行装を整はせ義秀へ
 与を状と書写めく標吉は應与し又安達父子へ與を書翰を廣光は

通与せし廣光ハ稻向夫婦一三ホ及妻の浅良井は消息してこそを
 標吉よりあはれ遣はし又元晴ハ呈書一通ハ三種の主産を士卒八人ハ齎
 又の廣光は俱しく鎌倉へ遣はし準備をこく整へくハ二月三日の早旦ハ
 廣光ハ鎌倉を投ぐ啓行し標吉ハ從者兩三人を拘り越中へ赴起りて
 又四五日を經る程ハ日草口澤の村長ハ陸續して人を走らせ信夫の館へ
 注進はる鎌倉の元使安達景盛ハ來臨あり縁由を兼さし將軍頼朝
 台命あり言見殿と召させしむるの旨云景盛ハ冠者の外戚なりけり
 この元使と兼りぬ本郡ハ賊地ハ近かり因り士卒三百人を隸られり廻
 口澤の郷ハ人馬を駐めく案内を待りのくこの旨を信夫莊司ホよ
 告ふとありより注進はると喘々演説をこの時莊司元晴ハ聊餘寒ハ
 冒されくあ不臥草の中はわり件の注進をすく歡しこは病苦を忘れく

遠く起つ若黨を以て義邦よこの趣を報知せしむ。詎使應接の
 準備をのぞき義邦水草十郎昌南と辨貫九郎ホ六七名の君黨と
 三十四人の奴隸を属く口沢に赴せ來使景盛を迎んとす。主從齊一
 混雜をかり時中城戸三郎守詮ハ立り騷が。既ニ衣裳を更めて芝を
 せし義邦を推し主の莊司を諫るのめり。かう俄頃鎌倉より
 安達村をぞとれ冠者を召させぬ。熟思ハバるる。實は
 そのうわん其の驛馬を以て云くと仰下る。其の驛馬の
 實を撈らん為冠者の病著ありと稱し其口澤へをせぬ。景盛村を
 迎へん早もつ。後悔ありと密語ハ元晴霎時尋思して終
 疑念あり形死あはれ。冠者も病は托し應接の礼を缺く。バ
 外聞遂に脱れ。不敏の咎めをいへん。執權遠州ハ

時政遠江守に極任す。王莽が野心は做せと久し冠者ハ蒲殿の兒子に
 此を鎌倉に請待して將軍の權を割んとす。火急の召の侍飲
 者ハ豫る驛馬の前御を疑ふ。汝が速慮せば。其の
 悔あらん冠者ハ何と云ひあを問れ。義邦小膝を進め莊司の推量愚意ハ
 ち。狐疑いと遅く。津谷日草ハ敵地はあ。口
 澤へ遠く。後仔細あり。義邦みづ。披
 詎使景盛を迎ん。勿論ハ進む言葉守詮ハ諫る。又ハ
 ち。其の百餘騎をぬく冠者ハ後ハ非常に備へ。昌南
 進。其冠者のかん供。三郎ハ復百餘騎を添へ。其の
 べ。但。後者の員を倍く。士卒五六十人を従へ。其の
 初元晴義邦の譏に任し。更ハ士卒の員を倍し。義邦ハ烏帽子の

紐を結び添狩衣の袖繕ひて閃りと馬より跨れば水草十郎鱒貫九郎
 その他の士卒先立後は後ひ齊くと口澤を望み移り出せば元晴ハ端近う
 立ち守詮亦共侶に祝してこれを目送りなり程本所はあらず卒ハ
 門戸の掃除路次の盛砂説使の儲は奔走しておのほ時を移せば信夫
 莊司元晴ハ病を推て礼服も更衣正門の方より望み大床に林几を立させ城戸
 三郎守詮亦その左右に居あぐれ説使の果臨をまつ程は俄頃も外面
 騒しく注進と呼びて走來り別の別人あり曩は義邦は俱しりる
 若黨鱒貫九郎あり矢傷金瘡夥しく全身朱子深なる縁頼ちうく
 礮と坐に六何みごと元晴ハ林几を放ちくみ出城三郎自餘の輩
 ろを縁頼より立ち仔細いちを尋れば鱒貫九郎ハ右に折屈け
 鮮血を吸め息を吻兒れば吉見殿鎌倉の御使安達河に對面

せんく口澤多る莊官が門前を馬より立ち進みて書院は赴死あへ
 待設る癖者共帷幕の内より二三十人立ち出と頭れ出矢庭は冠者を
 組伏とり後方は後水草十郎この為体よかど死怒りうく冠者を
 救んと大刀技醫して割て入り多勢を敵より戦せり當下賊將をあり
 立汝ハ既謀に陥りかぐろ誰為に狂かまかくの修羅將軍の御内を
 四天王の隨一とせざる神井鬼其猛虎あり這奴敵對其義邦ととく
 刺殺せと喝ま昌甫こも辟易してその大刀風や風うん遠は衆賊ハ
 勢をえられ叶ふべくもあらずが刃尖を口は衝く推串死々死々外画は
 ゆひ其ホハ大刀音も大変わりとくければ士卒必死とあひ決て技あり
 刃を晃し書院は乱に入んとは左右の蔭より賊兵夥群り
 外野時夏あまわり何処へとく遣ふべきを彼撃笛よとつう味方

敢敵を擇おど二隊よりせん戦へども賊ハ素より大勢之鏖を揃之差
 詰り詰射る矢子面を向うして仆るの教をある其某のものを報知
 ありんとあひひく辛く圍を殺脱り主従或ハ擒せられ或ハ破れぬハ
 敵の勢ハ十倍してやこの処へ推寄来んとせむぐてこの深穢でハ
 再度の役も立かざし是れまでとて引退し首を引抜たぐ腹掻切く伏
 ころろ元晴ハ愀然と天うち仰ぎて嘆息し天ある命ありかきられ
 偏よ吉見殿をせよとせんといふをりく只音も早まらず守詮が諫を用ひ
 鈍くも賊ハ謀られて竟既にあま及べし士卒ハ過半境を成らせ今又冠者
 後ひく破れぬもの少くは防戦んとすべく然あらず主従ありを
 一致して敵の圍を衝破り脱れんとハ難くもあらずと既ハ冠者を擒みせ
 りとて誰とよげば一日の老の命を貪るべし敵推寄かバ防矢射させく

敵腹を切らんのと守詮ハ其期も及び笹姫を刺殺し館は火を放け焼立
 軍期の準備をせんとせんく臆く與せ入りたる當下城戸三郎ハ家中の
 男女を召集せり老るもの稚兒の婦女輩ハ悉後門より落し遣はす年来
 莊司の恩を感じて面んと願ふは多かりとが中ハ血氣盛は志あるの五十
 人ハ正門を守らせ三十人は後門を禦せとの勇ハ後ハ十餘騎を留て中門は
 あり妻の孀行を召ていめり今ハ主君の姫とんと云云と仰しうども一圓落し
 共侶も命は代るべし同胞心をむらめく姫と人は俱しなり敵の推
 寄せざる間ハ後門より脱れ出越中あれ鎌倉あれ便宜のくへ入供せよ
 鎌倉か安達殿越中か婦員の若上稲向判五とてづいりて後廣元
 嗣忠使して東北はわりといふもこの変を傳さるハ必難は趣んまは

その二人は一人の途ゆく逢ふものあり。是も亦敵を欺けく姫うへを後
 也とく落しよめんとせんとあつてもあれども彼経任が欲する所の第一の姫うへ
 ありん途よ衆賊は追追られ脱れぬぞの主従三人自害する外あべくは
 とくつとつとが立れば爛竹の精悍く應としても煩伏のこれやこの世れ
 別とてあへば立わたりて去るべく洗み物といはれざるが守詮眼を瞪し
 りまひくと追ふとてり折るる具大鼓正門の敵の大軍推寄うと
 わがくて天地の響く関の声弦音夫叫馬蹄の裏にいつと際死戦ひの
 中を脱る爛竹の鳩鳴江と共侶は筐姫を扶掖死柳の腰は胆の天刀扱て
 後門より走りぬればまうはる名残を惜む女房乳母が泣声背後に
 りりたる程に賊は猛虎時夏前後の門を攻破すく真先ゆを連入る縁て
 期しるるが城戸三郎守詮の中門を颯と開せり彼十餘騎を左京

備へく面もあつて撃靡け鬼六と馬を接へく十餘合戦やう刀矢當り
 うこれば鬼六の浅瘡を負く十反あり退けが時夏も誘引れて正門
 を逃ゆうとの隙に守詮の中門は引入り味方の討死を教まふも
 四五騎の過ごうも数ヶ所の深瘡を負く再び戦ふべくも
 あつねは是もあつとあひてえ主君は自殺を勧んとて馬を閃りと乗る
 輿を望み走るあつて信夫莊司元晴の萌葱威の身甲は緋地の
 錦の直垂被く精好の奴袴を張らせゆり乱るる白髪は鉄打る鈴巻
 ちりく重藤の弓に握太あり鷹の羽の松箭を刈ひ矮樓の窓を開せて
 あつて敵を射落をこし四五騎も及ぶといへども目も餘る大敵を九牛が
 一毛あり味方の士卒は漸く勢れく残る守詮のこわれは今の死に死
 時とてくう箭を憂哩と投捨つ餘は階子城より立く書院のうらむは

城戸三郎守詮ハ立矢を篠毛と折りて。遠く走り來つ味方の士卒
 大半斃れく敵勝に乗いハ合戦ハ是々見自害ひへうと勸れがら
 点頭されも志ろあふへどくも笹姫を逆賊を奪取れとく火城
 放ちていれあ入甲の上帯切をち腹一文字ヲ掻切て吭を突と成う
 守詮ハ愀然と曾を拍く身と起し後堂ハ白蛇と見れば姉母の
 老若の婢女們自殺して死骸ハ冚を素草如し武士の家は住るものよ
 ありあふひあつたれも有繫ふ哀れひあつたれ。さああふあふあ
 とぐ中やうく笹姫ハ似る女房の亡骸の上坐し推居て姫の衣服をうら
 掩せ彼些ハ走遠く一度ハ火を放ちたるこの神井鬼六野時夏太
 自ら守詮ハ苦惱されく敵の多少をあらざれば中門の前は屯して
 人馬の息をうげせらるるは彼此ハ火發りく大厦高樓倏忽ハ黒烟の中ハ

ありとハ元晴ハ自殺せむを笹姫をか焼死しと救ひせと罵り馳死て
 中門を打破らせ時夏真先ハ騎込て懸る馬より閃りとなり立書院の
 へ趣く程ハ城戸三郎守詮ハ賊の大拍を撃んとそし首を半抜きけく
 廊下ハ横り陽死せしけり時夏ハよくも足踏越んとさるる守詮ハ
 臥あつらふと首を抜き横薙り又向脛丁と砍つるハ実ハ脚甲を
 けく條鐵半分砍て裏をかきぬれば時夏吐嗟と怪飛と膝
 折布と立んと尻守詮岸破と反起し疊菴と懸やろ時夏もた
 辟易して既ハ時夏は見えたり鬼六猛虎走り來つ短刀を抜側めく
 守詮ハ背よりその草搦を推揚く巻も徹とを刺と灸所の深
 ありればうへりあつた仰反りころを引倒し乗がりて馳て首を
 惜むべし守詮ハ智勇忠信人ハ優れくその功あはれわねども主従らふ

圓山の館
元晴守證
等戦死也

月長二編卷五



卓東云編卷五

十三

運弾く悪逆虎狼の徒は種れぬるを哀れ初と。さてもこの下を詭計へ
 豫て蕪途暴道が経任よさめ死勧めく更猛虎時夏は五百餘人の
 賊徒を授けその二百人の駒形山中は隠しかた鬼六猛虎を安達
 景盛は打粉刀野時夏は安達が家臣は扮しその賊卒三百人の鎌倉
 様の行装し、栗原賀美の山路を打越く速田郡より遠り入り日草
 口澤の莊官ホを欺死く莊司が圓山の館へ告知させ吉見冠者義邦が
 来迎する及びてそく莊官が一家の男女を砍殺し遂は義邦を擒ふ
 あく水草十郎を惣取り更は件の二百賊とち合して元晴が館へ推
 寄せ信夫主税を殺剽して笹姫を畧んと謀れりこまは是去歳の冬
 蕪塗暴道が圓山の館へ使して笹姫を徴し元晴拒く暴道と
 罵り笹姫は泣死す。口見冠者は妻せり又義邦は蒲殿のお子ある

り又達六が白状あり赦免近はあつと怒よ来くと説出せり
 暴道はそれより元晴ホを謀らんと欲しく程もあく間諜者を圓山の
 館に入れその便宜を窺せり今茲二月に至く江二廣光は義邦に
 外戚あり安達盛長が鎌倉の宿所へ赴死馬養標吉郎嗣忠は越中
 婦負の岩上へ趣たつより件の間者が告ぐ暴道は支をありぬと
 欲びて遂は猛虎時夏と謀をらせその方寸は陥り唯城戸三郎
 守詮のそのの虚実を揣く元晴を諫め義邦をたぬりりども
 元晴義邦は使景盛とあり惑され帰泰のありひが守詮
 諫言を用ひざりし悔いあり

中輯第三十

嵐の庭に連理木
 春に遇ふ羽生の梅

却説猛虎時夏ハ敵一人もあくなりぬれどこの日西南の風烈しくて猛火
 八方に散乱し迫つてくもあふれぬが且衆賊も火を滅させ焼落て後
 夥の死骸を展檢はる書院の焼迹は元晴々とわが死骸ありを
 引きせき首を取り又後堂のくま女子の亡骸夥ありの上坐は煉
 爛れらるるのれ筐姫ありとく衣の褌の焼残りるを引断離く證
 と兵糧財物大々を焼亡れ軍の勝れども利はるるの郡縣
 の又一物の取る心はけり贖緊要なる筐姫を焼殺してハ功は誇り賞を
 求るものあり猛虎も時夏も腹たしと諄々と賊卒を叱り懲らし
 その夜は焦原は陣取る人馬の足を休め黎明の比衆賊を進めく
 元晴が正方寺の杖城に推寄れども境を守る兵少くは落させて
 ともよるものありまゝと迫迫の民家より入りて米錢を掠奪し男女を

屠殺しあはれ女子あはれは白昼は輪を乱妨狼藉いづくもあはれ
 暴は荒して第三日は平泉へ凱陣し賊首任は合戦の次第を告ぐ生
 擒義邦と幸居元晴が焼首并昌甫守詮が首級を足せ只彼肝心の
 筐姫をもくも自焼して烏有となりぬ城戸三郎守詮が防戦の時終りて
 いかにもまゝありに更は過怠はいひぬと猛虎時夏辞齊一夏の為体と
 演説して焼残りる筐姫の衣の褌を證據とて當下修羅五郎経任ハ
 燕途鶴東二暴道珍浦五五六方相ホを後すく端近う出つ實檢し
 件の衣は褌とんく蕪然とうち笑ひ猛虎時夏をかくの如く疎忽ある
 筐姫をれらや獲りうとく幸出せと喚立れば婢女們五六人若女雜り立
 かり姫の左右の身を拿まき高欄の下は推居れば筐姫は泣腫せ日
 ちもつんおがぬ義邦の高直は小を傳られ屠所の羊は異なりぬ

形容又宵潰れく喃こが伏飲浅きやん痛しやと声立く走りたるを
 階より膝衝く岡掛あんど遮り留る婢女們が栞柱忽ちぬ衛身身動を
 伏沈つて泣あふ義邦も筐姫の声を聞けり眼をひらきれば恨このちを鏡曇
 るの宵の各々でかへる家かた吾妹子が歎きさごとと推量る身の薄命ぞ
 かこりく抑九歳の八月より十九歳の今茲まで霎時も安堵の思ひせせむら
 やく釋し冤屈ありあ不恥しだ傳索かす浮身ハま外ふ又あるべしやといへば
 えよ若も堰と苔清水あうらふべくもあはぬ世よりのものもつと頭を低れ死を後の
 外かろとなり當下猛虎時良ハ呆く神社頭高鹿拍の如く刃死正く
 焼死しと見え筐姫ハいりあつてあま出現せしやんあを不審と咄けハ蘓途
 鶴東二進之出其も暴道が討畧に彼守詮ハ頗思慮あり義邦擒まかりぬし
 づる敵の寄かんを揣りく筐姫と落し遣るべし両頭領あはれく只

攻撃す時を核さハ元晴ホと撃つるとも名さハ此を走りくハ勇して
 その功あはれ似うとあひまさればれも亦三百餘人を従へて和殿ホが後
 より推せ元晴が采地の巷門毎部しく落人をあ程果之日本日
 黄昏よの雄々けあ女房兩人主の息女とか深し美人を扶掖つ
 駒形の麓の小野を過るありその為体向けりて筐姫とをくれば士卒を
 進りく推せ巻せ生拘んとあもとも彼女房ホ刃を引抜三人よをを
 負せ三人を矢度破仆しく縦横無礙に防戦ハ大風いづれも烈々れば
 女子を侮め味方の負ハ数あせども多勢あれば取も逃れ某が
 幾つ箭よ一個の婦人の乳の下射られ仰ぎ多し今一人も深傷を
 負ひつ脱れさくあひる走り近つた件の美女を刺殺さんとある也と又
 一箭よ射て殺しぬとの間ハ彼美婦人懐劍を引抜たたく自害せんとす



竹馬江の道
途に賊兵

かこし地

小舟の江

某を投捨く飛鳥の如く衝と寄せく懐剣を奪ひ取りその名を問ふも
泣く答へばかくて又五七人の落人と生拘つこまらふまをせくその名を問ふ前
乳の下を射せざる女房の元晴が老黨水草十郎昌甫が妻鳥江といふ
後射殺されたる城戸三郎守詮が女房扇竹といふの彼と此とハ切味
あり又この美人の筐姫は紛れをわといふより準備の張興は扶来和殿
ホよ先づわく將軍に献りぬ疑心を散りぬへりと誇貞は説示六猛虎
時夏頭を搔た狗骨折く鷹は捉るといふ諺ハこのよりあらんほど
感心く口虫いへとありあゝ暴道が能を捐て是より嫌忌のあひ
わりされども氣色は顕る時夏ハ膝を進むく任任をうち向上げ
將軍この義邦ハ範頼が子でいへばやく処ふく尊故せくる忽ち進だ
わらん且某と舊怨ありわつと時夏うけらるる首を刎けんといふ任

領を牽去せんとするを見く珍浦五十六諫るいあり將軍ハ義経ノ夫人
 子ニと稱し人ハ食れを實とせ既實とせれども也筐姫を妻り
○ハ判官ノ為ハ又此ノ義邦と範頼ノ子トなり○世ノ人トも之を知らず
 彼範頼ハ判官ノ兄トなり○不和ハなり○今ノ子トなり○義邦と謀りぬレ
 人ノあり○離れ背はなく○竟ハ大事トなり○今ノ子トなり○賢慮ありよ○
○ハ義経沈吟し一言と死にいふと同ハ五十六答ていふ○愚意ハあり○
○ハ○只○此○ノ吉見義邦と緊獄舎に繫せるを牽出して○
○ハ○形勢ハ筐姫ハ在るを義邦ハ苦痛ハ堪はず○筐姫ハ説諭して○
○ハ○隨々又○筐姫ハ夫ノ呵責と救んぬハ君ガ枕席ハ侍べし○
○ハ判官ノ任事と義邦と救ふに死して○助けを許さし○
○ハ是レを名利面全くと真と密語り五十六答ていふ○

経任ガ為ノとハ暴道猛虎時夏ホ或ハ筐姫と奪取り○或ハ義邦と
 擒ず或ハ元晴主後と救して○其ノ兩郡とち取りる功を捐すて○義邦と
 害せんとするを否し筐姫と説階平して己ガ功ハせんとなり○是レハ○小人ノ
 機変ハあり多切べ一同話休題経任ハ五十六説すて○義邦と
 點頭汝ガ説論尤理あり也○筐姫義邦と救んともハ○磨らず○
 義邦も又○終り呵責ノ答と脱んともハ○筐ハ説勸める磨らず○
 慰めよ○威徳あり○女子ハ迫らんとハ易なれども○○其ノあり○靡ふ
 あり○洞房ノ中ハ趣を筐と奥へ伴める侍女ども慰よ由断して自○
 害とせる義邦と獄舎に繫せる間断なく守るべし○暴道猛虎時夏
○ハ恩賞ハ功ノ多少ハ○沙汰せん食ス此ノ旨○好まし○此レ彼レを捉つ○
○ハ翠簾垂せる警蹕ノ声ハ共身を起せる無念ト向上る義邦ハ顔

見あひたる筈姫再びよと泣沈むを誘ふへとく婢女們よと合ひ伴ふ
 後堂良人の獄舎の阿鼻地獄佛よ神小捨られ絶え對のまは緒なきを
 限りとえうへつらりのうちは辞別おうせぬもの世の中は花は嵐の妹背山裂
 れく内と外のうへ牽れゆくも痛あなれされば又経任の筈姫を獲らりと
 いども拒むていあご後つひ彼文字掬を夜とあく日と夜くこほりふのこ
 果らなく時夏は返れとかい文字掬も今とらよ時夏が妻よりての四頭領の
 下はありておのづから權もか又経任が側室されば人の愛敬大くこわくも
 この故は只管辞を巧みく時夏を嫌ひふ経任のくうろ惑ひてそが
 いあまよせざうとかい文字掬あは便宜をほく妬しとあま筈姫を殺し
 又と勸れども又文字掬は比まへうやあまらる美女あれば経任のこのす
 のと生應して後を心かぐも筈姫を靡後せんとおとりのこの為体よ

鶴東ニハ文字掬と時夏は返しあへと催促は経任是をうゆさく
 あひて鶴東ニと鎮守府の守将とし時夏を副将とてそのと経任の
 鶴東ニは諭はう汝は只顧文字掬が時夏は身を任せし故これ又
 使ふべしとと理りへさるうあれども渠今さうよ時夏が妻よあること
 願ひせよわ余を共よせしとく情をめてあうまあわねば渠よあはく
 何うあらん筈姫は後ハ文字掬を公しやうんそれまでの勸賞は新茶の
 時夏を鎮守府の副将とて寔は過分の大任あはばやられつらう諭え
 とく時夏を招死あせ太郎汝は文字掬を返さんとあどもいふせん件の
 女子ハ病著よ卧しつゝのあご始起せありて前日の勸賞は汝を鎮守府の
 副将とて暴道と心を同じく江刺磐井王造の三郡を管領とて押
 鎮守府ハ東北の杆城より尤予が安危は係る要害の地あはれとく久く

敗城とありこれに速に修復せしむ新泰のその重用四天王は異
 なるに宜忠戦を勵むべしと真成は示せしむ時夏は拜伏して泰に應ず
 るけれども時夏はあちの中歡は第一の文字捐を返さるるを恨み第
 二の日来あちよりぬ暴道が下風は立との隊は入属られハ如る限り
 かかるとるのよりぬ六徑任を資けく鎌倉へ歸らんぬを悔ひたるを
 たりとみざるはゆいぬどもさへ己死なわされが鶴東二と共侶は五百餘人を
 引卒し鎮守府に赴き敗城を修復しつをとりあを守りたり不題
 鎌倉の信夫莊司ハ賊は移れ吉見義邦ハ擒はせられ徑任新ハ磐井
 玉造の兩郡を畧奪して鎮守府の古城を兩員の賊將は成らせ勢ひ
 おもく痛あるよし注進志くゆられ執權北條遠江守時政驚患ひて
 評議をかこみ評定衆大江廣元問注所の別當三善善信ホと追討の

大将を此彼と擇ゆども足利義兼敗軍の後撰は應と死めあり
 さればとて安達盛長和田義盛秩父重忠をど先將軍頼朝の功臣あり
 年も老より継台命は應とて役は趣んともつはともこの三老は任はせしむ
 此次とをり小定ゆりて日を送り有一日時政ハその子相模守義時と共に
 尼御臺頼朝卿の後室の御所は泰りそ件のをあうし誰を討しお
 遣はれたるも相譚まうせしむ尼御臺微笑く評定衆は擇りて
 征東の大将をいふして如実をどが如実の政子定めぬ死すあはれ智ある人
 同んのともしつ後方はゆりる義時の嫡男相模太郎泰時をこえりて和殿ハ
 年尚少れどもその才ハ大人びり何るも將軍頼朝の兄弟は憚ること
 かくおしりゆふおしせよかあへくと招かれ泰時ハ阿と應り膝を進て
 額をつ死弱冠の某が甘羅の才はわくをしく助言ハ慮外の限りをされども

この先帝は他人の心を尋の趣を答まう所らん不忠ありとされば
 兵書をもよく敵を知りての勝敵を悔るものなりと云ふ本文ありと云ふや
 彼の逆賊任任が形勢を果ゆるは梟雄なりと幻術あり風を起し雲を起し
 樹を伐く士卒と石を撲く牛馬と五兵六道自由と好う今鎌倉は
 智勇の武士多しといへども二の足を踏むこの故に現名する大小名此度の討
 ち擇れく復ち負るるありと身の瑕瑾ありて推營此
 御威光も亦薄れは似たりん飲り愚意を擇むは前駿河源廣綱
 朝臣よもはれぬをこの人のいぬる建久のちめ聊不足のりありて忽は隠
 遁一年未武蔵崎玉ある太田の莊ありと雲り迹を村落に埋むといせ
 先將軍の親族源家の上臈より何人か知らざるべ死且その祖父
 頼政卿より相承せられと傳はく雷上動の弓水羽兵羽の箭のり

世あり人の知る所紫宸殿に怪鳥を射つるもこの弓箭の徳は
 よかりされば任任が幻術を打んり疑ひを辞せ卑し聘を厚し
 此度の大將軍は任りぬる萬は一つ兼諾せん汝賢愚いうゆと美ある辨論
 衆聽を驚せり尼御臺の歡びいへばさる祖父時政感嘆して溢るる
 笑片向泰時通あうり速は連署をめて駿河前司を召し死せし
 いへば義時沈吟ト駿州既よ世を憤り受領を棄く隱道に連署
 りてことをまよともいふる召は應む死蘇秦は等し死説客は死
 輒く動しこがらん猶且評議をせしめ使を擇めりといふ諫れは
 尼御臺相州義時をの思慮定ま當り甲ひと擇んより泰時を使者と
 せん若輩あるも將軍の外威遠州の孫あるが廣綱を悔るるは將軍
 頼家よはえあひくさる武蔵へ下はべと他ものもかく仰れ時政義時

兼伏し泰時おん兼仕れといひまゝほりく困ト果幕下頼朝おまを
 かりし時後悔のみありて廣綱を召されらるるも竟しまゝなり
 老と笑ひさると泰時が黄咏りく彼人は説んて心ゆとわたりて侍但
 難波をまゝ死に君のめんをまへざるは似たり。下は状御説を傳ふ
 及びて彼人との便宜は就願ひまざるもあるべし何ぞあれ許されん欤
 この羨美り届ぎて彼処へ起死すといへば時政うち領死汝が推量
 さるるうちん許さるるも許されども今へひびき願の筋もあるべし
 といふを推辞くまゝんぬこの見使を勤ごし餘人は仰付られよと
 いせもあはれ時政の氣色変りく又いつ中と詰れば泰時莞尔と笑
 故幕下の見威徳も召く事ぬ駿州を召るべし死ぬ彼人の所望を許さ
 夏成るべしやとされその望も君のめんをまゝ御許容おたす

勿論そこの他の言下は許して重用の美を示さる後悔其処は
 立ごし論言の汗の如し武命も亦あるべし後日は支の破れなりと
 泰時が腹を切るとも國は益あり君は損あり強くやるよわらば再三
 内思案わらおほしともしひ入る回答しうは義時の只領くのミ尼御臺
 つくと笑つて感嘆浅うら太郎が意見道理は稱へり廣綱望むし
 あら何ぞあれ許容せん和殿が許せし如実が意ぞ如実が許さる將軍も
 執権も免許ありんあつこの旨を存せよと叮嚀し示し更へ泰時へ謹て
 壽の詞を述現國は道あると死の野は遺賢なりといへり既しかくの
 なるが台命を頭は戴死このおん使をかりぬべしと答あうせは時政も
 やくは納めしと一族齊く退去なりかゝる時政八件の支の趣を賣元
 善信ホは説示し頼家卿は受えあひく泰時は使節を賜り支既ふ

整々れば次の日太郎泰時ハ後者を賜給く馬の足撥せしめり。只
 二日の程おとて武蔵の太田へ赴たなり。程は駿河前司廣綱ハ
 去歳の六月且見姫と媼子井平は妻せしむ。これを六條藏人仲家の
 後と定め渠が故郷の名を取りつ又実父兼光と養父仲家の片名を
 取く多賀藏人光仲と改名させ。この子の如く鍾愛は夫婦睦しかり
 たり。昔蒲の尼公の歡びハ又更よはべり。程はかく是の年の終り
 執權時政の下知としく義邦廣光井平義秀水逆待りたる。無実ハ
 あり。皆赦免せしむ。その実あり。一人は歡びハ一家安堵の
 事。おとせり。かく歡ある中ハ又悲も。此來り昔蒲尼公迂化り亭年
 九十餘歳之。迺伊豆國藍玉の舊院ハ葬送して追薦の法會叮嚀に
 物せしむ。この中ハ光仲ハ高恩の美を。実の祖母を喪る。この中ハ

且見姫共侶ハ哀慕の情己と死。かくて今茲ハ果敢り。暮れ。明けハ
 建仁三年二月下旬廣綱ハ母屋と光仲夫婦ハ讓り。藍玉院ハ隱居
 せり。この時ハ光仲ハ義邦主從義秀ハ往方。いと想像り。この
 かくあはれども昔の井平ハ。此身と。旅も。泊り。廣綱
 仕る。主の如く父の如く真中下河邊の兩老黨を。この師の如く兄の
 如く。おとす。謙遜して微賤を忘る。と。一時ハ二月下幹有。一日鎌
 倉のハ使北條相模太郎泰時下向の。俄頃ハ。この沙汰あり。ハ廣綱ハ
 訝り。かく。礼服ハ更。母屋ハ來り。使と迎へ。對面ハ。當下泰時ハ坐す。
 著く威儀を。後ハ某俄頃ハ使と乘る。別儀ハ。ハ逆賊任平泉ハ
 跋扈。ハ既ハ教郡を横領。殆奥羽ハ擾乱せり。ハあり。是ハ足利
 左典。ハ既追討の台命を。兼り願勝ハ乘ると。い。ハ。副將時夏ハ叛逆ハ

ありて不慮の敗北に及べり経任はく猛威を振り信夫莊司を高館に
 殺し吉見義邦夫婦を擒みせり。近ごろそのまゝあり抑賊首経任は残
 忍猛悪のまゝに雲を呼び風を起し形を隠し影を埋る幻術を始る。あ
 復び追討の大將を擇み小その任は當るは寡一駿州の將軍の庶族を
 故幕下も惜せぬ。武藝文学の頼政卿より相兼して家は名弓
 神箭あり経任を討滅せん。の駿州の外あり。將軍家のももさ
 執権台老衆議一決して則征東の大將をかゝれんと冀ハ辞とかく民の
 塗炭を救ひ免仰あまぐ件の如く恭しく演説を廣綱謹く承り
 御説畏りゆひぬ然といへども某既隱遁し烏髪の沙弥たり今更
 弓箭を取るべからばこの髪ハ脚免を蒙らんと固辞を泰時推禁りや
 隱遁しあふとも國は居るハ國恩あり伯夷叔齊が首陽の飢渴亦何の

益ありん泰時善筆なりといへども外戚の下よせり今つらつら歸去
 鎌倉へ入らせし中途は腹を切らんの人を救ふ佛の慈悲なり枉く
 ちん美あれりと説勧めば廣綱は黙然と眼を睜りあつて某今一才子と
 薦あげて経任を討むべし。これは廣綱の塔多賀蔵人光仲といふものなり。
 昔晋の祁黄羊がその子の午といひしめを平公は薦ゆる賢は做かす似く
 かりいづ嗚呼かれど子をどうと親はあつた塔も亦如此あり。光仲ハ文武の
 奇才廣綱が類はあつた。あつて弓箭ハ塔幸は彼郎は譲り託し渠は経任
 追伐の大將軍にせられれば廣綱ハ副將となり。陸奥へ進發せんこの譏却許容
 なるときハ台命は應じ。即坐は頭髻を剪拂く斗藏行脚は公人の餘念
 かくいふひ入ても薦る泰時空しく頭を傾け現駿州の塔を。塔ハ則て子
 をか子として親に代るとおぼしめ願くは素姓を穿ん原は何小の人

かりやと問へば廣綱うら微笑を渠ハ元来木曾の老黨樋口二郎兼光が一子
 なるを頼政三位の養子なり一六條藏人仲家が遺蹟として仲家がぬぬ
 女兒某々養女なり且見姫を妻しなり彼樋口兼光ハ朝敵木曾が殘黨がれぬ
 降参して後誅せしる光仲ハその心操忠信なり武勇良しう證人ハ廣綱之只
 その実を取らんといふが重用せむめこの事ハ泰時うら點頭その実又いふれ
 かくあれ仲家の後として駿州の塔かぶ故障あべくもあはれ對面を許さぬ
 在宿の如く問へば廣綱歡いげよそ彼男子が幸に藏人として喚立れば阿
 應く光仲ハ烏帽子の斜推直して素襖の袖を搔掻い廊下より遠り入る
 送未坐し著るを廣綱らんくく該使死目をゆらぐ渠が舊名ハ媪子
 井平と喚れく執権おもをれしもの故ありく下野の足利へ追遣らる
 時夏は属られしとも渠ハ刀野が不義を憎く義邦と共に逐電し逆徒なりと

相模太郎泰時



知人の才
 泰時
 光仲を薦む

多賀藏人光仲

証られ、藍玉院は潜びてさうかく去歲の十二月赦免せられてかひけしうた
 あぬぬのふとといふ泰時晴を定めくもんかうえつうら驚死定は一別に来終
 起居安寧致珍重く誘こめと請まれば光仲再拜頓首して別後見泰小
 ありぬて面忘れもあてよ適丈夫はあひひたさうざうー再會ハ幸甚しく
 回答をせればうち笑く今日より某と和殿ハ則同輩之枉く席を進めると他
 かひの廣綱ハそのとへと光仲をほり近く招きよ誼意の趣予が返答ハ
 彼処ゆくさうん和殿を將軍家ハ薦めたりく經任退治の大將と一これハ
 則副將とんこの旨を存せんと説示され頼をつ死時夏が謀叛しく賊中よ
 走りーのハ伝せられども吉見冠者ハ擒せられ存亡之うあざうすしと
 らぬく兼知仕の驚あへ所之彼人と某ハ断金の交あり信夫が錯はわりたりと
 あざうしと残念れ國家のむる友のる馬前執戟の歩卒とあて運賊と

討んす素より望む所けれど某何の徳ありく大將を巧も死況家翁を
 副としくその上はあうんと冥利外用物体か御許容あて死さうか
 この議をくりハ兼引がごとくをあく辞やせん廣綱頭さうち掉さる和殿が
 私有り忠臣ハ家礼を説く和殿が大將とんとも廣綱副將とんとも全
 合體しと賊を討功成とたハ君の光則國家の幸か御許容あてハ
 辞退せんともあう既に決まり再と議もとあれと制めく泰時さうち
 對ひ某ハ若居水飲の隱者之繼台命と辱まといと今更柳堂もあへ
 うし願ハ光仲を召さるー又某ハ名代の老黨間中華人守直を鎌倉へ
 遣まへ御許容あてとも野人のさ隨あうく執達を賜へといふ泰時さう
 且く深念しかくあていひは強くその身と伴ひがごとしや駿州副お
 うとも台命は應せられハ使者の面目國家の幸ひこのうや忠に截入を

薦奉のりす届くかあり。將軍家の執權も俟まひくをどつたけの鎌倉
おでハ三十里一昼夜もかほつちか。今日直まは伴人準備せられよしを
ぐせハ廣綱ハ歎びて次の間ハ信りける間中下河邊の両老黨を召よせつ
云くと命をれば河守直下河邊高吉ハ詭使泰時ハ見泰一且光仲の
後者を擇と定め或ハ詭使ハ果子をもちめかどはる程ハ奴隷ハ馬ハ鞍を置
練を暴く牽出をかくく光仲ハ且く奥ハ退れく鎌倉へ趣くよしを
且見姫ハ告あつたれば姫ハさるり家中の男女歡び祝へ奔走ハ光仲
衣裳を更りく舊の席は著しくハ廣綱の名代間中隼人光仲の介添
下河邊小三郎この他光仲の後者長海花尾如世凡若黨奴隷に至るまで
精悍しく行装しく泰時の使者ハ打雜りちや外面はせりる準備既ハ
整へハ光仲ハ恭しく廣綱ハ辞し別れ泰時ハ後ハて齊一馬を騎せハ

廣綱ハ立かぐ。前門のこゝへ送り且見姫ハ物見の窓より婢女ハ
うち困れく光仲の馬の尾筒のえを尻あつまで目送り多畢竟光仲
將軍頼家卿ハ見泰しく任退治の大將ハ拜任せられ廣綱と共侶ハ
夥の軍兵をゆく陸奥へ發向し任任ハ討よ及びて戦の勝負如何
とハ編を嗣死巻を易く第四編ハ解分るとんバあらん。
作者云朝夷義秀がゆこの編第廿三條ハ説物との外ハあつたその去來を
演るハ暇あつた且江三二廣光馬養標吉郎嗣忠ハがらも並ハ第四
編刊行の日との巻くあつた分解せん任任ハ物語ハ長やうなればあり。
○又云拙著 玄同放言 初版人事部のヒあつた刊行を製本方ハ
成まり亦との書肆のあつたもの。

朝夷巡鳴記全傳第三編卷之五



編述

曲直守馬琴合稿本



出像

一柳齋豊廣画



刊字校合

平安

操亭琴魚考訂

戊寅秋七月画者備書卒業同年冬日刻成
文政二年歲次己卯春正月二日製本發販

刊行

江戸馬喰町三丁目

若林清兵衛

筋違御門外神田平永町

山崎平八

書肆

大坂心齋橋筋唐物町

河内屋太助

江戸著作堂主人新編畧目

浪華書林 文金堂藏梓

朝夷巡嶋記

初編 二編 三編
統計二十五卷 既行

俳諧歳時記

四季雜恋詞よも細注
横本 全二冊

同書第四編

來己卯十二月相違
む賣出にてり

月氷奇縁

五入と本 全五冊

里見八犬傳

初編 二編 三編
刊行 第四編 嗣出

新累解脫物語

右同 全五冊

燕石雜志

奇終珍說弁論とく
ありろ死隨筆と全六卷

昔語質屋庫

在文の俗説辨
五入と本 全五冊

家傳神女湯

一包 婦人諸病ふり第一産前産後ちのふもつと妙え又とつとふ
よりふあひは用ひく急変をととふべし世よちのちの
ありかー茶まーと又と功能くのとたはまられたるべし

精製可應丸

婦人つら虫妙藥

中一由をえらる製方とつまびつらり調合を秘傳ふをふらと
りてまの幾よりのまふ丸と百倍とこうのうとびつらるるる
大包二百粒余入代式朱中包三千六粒代式五ト小包十粒入代五分
婦人毎月つらむのふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
をりお下りかひとふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

製衣藥并弘所

江戸元飯田町中坂下
南側四方ふそ店の向

瀧澤氏精製衣



取次所 江戶芝神明前和泉屋市兵衛
大坂心齋橋筋唐物町南入河内屋太助

曲亭画 浪華書林

文金堂

本林本太助

